

ライフイメージが及ぼす死観への影響

円環と直線のイメージ画を用いて

川本智映子*・岡本祐子*

Influence on the death view which a life image does

Chieko Kawamoto* Yuko Okamoto*

The purpose of this research is to clarify the relationship between life image and views on death during adolescence, and to investigate how the form of the life image gives rise to differences in views on death. In this research, based on prior research, we conducted a survey hypothesizing two main types of life image: circular and linear. The subjects of the survey were 78 female students enrolled at University A. The method used was a survey comprising life image graphics and a 14-item measure of views on death. Based on the results of this survey, the following points were indicated: 1) No clear relationship was seen between life image and views on death. 2) One of the unique characteristics of views on death as held by adolescents is that these views can be categorized into one of three types: Fear/Immortality High; Fear/Immortality Medium; and Fear/Immortality Low; and 3) life image is not limited to either “circular” or “linear”; in some cases, the life image has characteristics of both.

Keywords: life image, views on death

問 題

今日、死にまつわる問題が社会的に取り上げられることが多くなってきている。例えば尊厳死や脳死に伴う臓器移植、安楽死、自殺といった死にまつわる問題が多岐にわたる。死の問題は高齢者に偏在するものと言われている（澤井，2000）が、死は高齢者や不治の病に伏している人のみが抱える問題ではない。死は生と表裏一体であり、死を考えることはひいては生を充実させることにつながる（デーケン，1996）ことから、死と向き合うことを避けず、いずれ迎える死に向き合っていくことがよりよく生きるためには重要となると考えられる。これは死と生は表裏一体であり、生を充実させるためには死と向き合うことは誰にでも必要であり、死をどう迎えるかは、生をどう過ごすかと言い換えることができる。しかし現代は死に対するリアリティが希薄なことから、死と向き合うことは困難な時代であり（隈部，2006）、Aries（1975 伊藤・成瀬訳 1983）は、現代を「死をタブー視する社会」と称している。なぜなら、死には少なからずネガティブなイメージが付与してしまい、死の問題は不吉さや恐怖を伴うという理由で忌避される傾向にあるからである。

* 広島大学大学院教育学研究科（Graduate School of Education, Hiroshima University）

ここで、死を考えることにより不吉さや恐怖などを喚起するには、死に対しある程度の認知が必要とされる。それでは、「死」という概念はいつから認知され始め、現実的に死を考えるようになるのだろうか。死に関する概念や態度は年齢や認知発達と関連しながら発達していく（丹下, 2004）。影山（2003）は、「死」についての理解や意識が成熟するのはある程度の抽象的思考が可能になる12歳以降であると述べている。しかし、死は非常に抽象的な概念であり、死について現実的に認知するようになるのは、青年期からである（津村・笹森・田中, 1998）。したがって、青年期はより現実的に死について考え始める時期であると考えられる。また、青年期は死を考え始める時期であると同時に、他に特徴的な性質を持っている。つまり、青年期はアイデンティティの確立や親からの独立という性質を持っており、個としての発達が最も著しい時期である。このことから青年期は自己の発達と、死に対する態度の発達は相互に影響し合う時期（丹下, 2004）と考えられており、これまで青年期の死の問題について、多くは自殺との関連で検討がなされてきた（丹下, 2004）。内閣府の若者白書において、青年期の死因は自殺が最も多いと示されていることから、死に対して何らかのイメージや考えが働いていると推測される（影山, 2003）。Hankoff（1975）は、自殺についての熟慮や積極的な死との対決は青年に対し、人生における時間のより大きな意義の感覚をもたらすと述べている。以上のことから、青年期は死を現実的に考え始め、またこの時期に死について考えることは人生において重要な意味をもつことから、青年期が死に対しどのように考えているのかに注目する。

これまで、人が死に対しどのように考えているかについて、心理学の分野では死に対する不安に着目した研究から始まっている（Templer, 1970）。死の不安を測定するために開発された「死の不安尺度（Death Anxiety Scale）」を用いて、死の不安や性差や年齢による違いなどさまざまな関連が検討されている。しかし、死に対する感情はネガティブな側面ばかりではなく、有意見性とといった肯定的側面を含む多面的側面から測定する必要があるとされ、死の態度尺度（Death Attitude Profile-Revised；以下DAP-R）（Wong, Recker & Gesser, 1994）や死観尺度（Spilka, Stout, Minton & Sizemore, 1977）が開発されてきた。DAP-Rの特徴は、「死への恐怖」「死の回避」「積極的死の受容」「逃避的死の受容」「中立的死の受容」といった5つの側面から死の態度を捉えようとしていることがあげられる。死観についての研究では、Spilka et al. (1977)がある。ここでSpilka et al. (1977)らの死観とは、死に対する様々な意味づけや態度であり、日本でもこの死観尺度を用いて多くの研究がなされている（e.g.金児, 1994；金児・渡部, 2003；河野, 2004）。死観尺度は43個の項目から構成されており、「苦しみと孤独」「浄福な来世」「無関心」「未知」「家族との別離」「勇気」「挫折」「自然な終焉」の8つの下位尺度から構成されている。死に関する態度や感情については、死生観や死観、死に対する態度などさまざまなものがあげられる。死への態度は一般的態度と共通しており、感情（affect）、認知（cognition）、行動（behavior）により構成されており、実際には死生観と大差なく用いられている（川島, 2005）。また死観は死生観に内包される概念ではあるが（川島, 2005）、特に死に関する観念に焦点を当てていることが特徴である。

死に関する態度や感情を測定する尺度を用いた研究の一つに、世代ごとの特徴を捉える研究がある。その中でも青年期の死生観の特徴は、他の世代よりも死への不安が強いことがあげられる（海

老根, 2009 ; 田中, 2001 ; 田中・岩本 ; 金児, 1994)。青年期が死に対しネガティブな感情を強くもつ要因として, 以下のようなことが考えられる。第一に, 死を空想的なものとして捉えていることがあげられる。影山 (2003) はゲームやアニメなどで描かれる死から受ける影響が大きいと述べ, また核家族化により親近者の臨終に立ち会う機会の減少により, 青少年の死生観を観念的なものとしていると述べている。死別体験といった実際の経験が少なくなる一方で, ゲームやアニメといった非現実的なものから死をイメージすることにより, 自分の死と二次元での死との感覚との間に大きな溝が生まれているのではないかと考えられる。その結果, 死がよく分からない, 不可解なものとして不安が大きくなるのではないかと考えられる。第二に, 日常における刺激の影響である。死について考える際には具体的な死が考えられやすく, メディアを通して報道される事故や事件では, 犠牲的なものが多いこと (丹下, 2002) があげられる。このことが死に対しネガティブな感情を抱くようになり, 日常的に受ける外部からの刺激が, 死についての理解に影響をもたらしていると考えられる。

以上のように死に対する感情や態度について尺度を用いて理解しようとする研究が多く行われてきたが, 抽象的な概念である死に対しどのようなイメージを持っているのかについて, より深い無意識的側面から理解しようとする研究も行われている。藤井 (2003) は, 大学生を対象にテキストマイニングを用いて死のイメージを測定している。その結果, 人生の終焉や避けられないものという現実的側面と死後の存在などの霊的側面との両面で捉えている。また, 斎藤・林・藤野 (2003) は, 東大式エゴグラムと管訳 Rosenberg の Self-Esteem10 項目を用いて死のイメージを検討している。その結果, 死に対してもつイメージとして「怖い」が最も多く, 続いて「寂しい」, 「苦しい」である。死のイメージを捉える研究においても, 尺度を用いた研究と同様に青年期には不安や恐怖が強いという尺度を用いた研究と結果が得られている。

これまでの研究では, 主に死に注目した研究が多くなされている。しかし, 死と生が表裏一体のもの (デーケン, 1996) であり, 人は人生を通して常に死や死ぬことについてのテーマと関わり続けている (丹下, 1995) ことから, 死に対する感情や態度を捉えるだけでなく, 生をどのように捉えているのかについても検討を行う必要があると考えられる。ここで, 広井 (2001) は, 死に対する考え方を考察するための一つの視点として時間に注目している。広井 (2001) は, 人が生まれてから死んでいく人生の全体的過程であるライフサイクルについて人々がもつイメージをライフイメージ (life image) と定義づけている。このライフイメージについて, 広井 (2001) は直線と円環に区別している。直線的ライフイメージは, 「人生を成長や上昇とするものであり, 死はその果てであり, 無を意味するもの」であり, 円環的ライフイメージは「生と死は同じところに位置し, 生と死は連続したもの」である。円環的ライフイメージと直線的ライフイメージとで大きく異なる点として, 死に対するイメージがそれぞれ異なることである。直線的ライフイメージでは死は無を意味するものであるが, 円環的ライフイメージでの死とは, 人生における一つの通過点でしかならず, また不変を意味している。これまで, 人生のイメージ画から死生観を探る研究がなされている (森田・大西, 2005 ; やまだ, 2000, 2002) が, 死生観をイメージ画からのみ検討しており, 尺度などを用いた実証的研究はなされていない。そこで本研究では, ライフイメージを視

覚的に捉え、ライフイメージと死観に関連があるのか、また円環的ライフイメージと直線的ライフイメージが死観にどのような違いを及ぼすのかについて、明らかにすることを目的とする。なお、ライフイメージについては描画を用いて、死観については尺度を用いて検討する。

方 法

対象者：A 大学女子学生 1～4 年 206 人。

有効回答率は、質問紙とイメージ画の両方の記入がある有効回答票数は 78 部で、回収率は 37.8% となった。円の用紙に記入した人は 44 人、直線の用紙に記入した人は 34 人みられた。

期間：2010 年 7 月～同年 11 月

手続き：以下の内容からなる質問紙調査を行った。

(1) フェイスシート

依頼書を兼ね、調査への協力は任意であること、回答は途中で中止することができること、結果は統計的に処理し個人が特定することができないことを明記した。依頼文の次に、調査者氏名、調査者の連絡先、指導教員名を明記した。

(2) 死観尺度

河野（2004）の 14 項目の死観尺度を用い、4 件法で回答を求めた。この尺度は、河野（2004）が Spilka et al（1977）の Death Perspective Scale（死観尺度）と渡辺（1998）の死観尺度を参考にし、死観尺度を新たに作成したものである。この回答に「強くそう思う」を 1 点、「そう思う」を 2 点、「あまりそう思わない」を 3 点、「そう思わない」を 4 点と得点化した。なお、この調査は 2010 年 7 月から同年 11 月の間に実施した。

(3) イメージ画用紙

A4 用紙を用いて事前に 1 枚ずつ中央に円と直線を記入した用紙を配布した。森田・大西（2005）の人生のイメージ画を参考に、「あなたの思う『人の生まれてから死ぬまでの一生』をイメージして絵に描いてください。また、描いた絵についての説明を書いてください」と教示した。なお、円の用紙か直線の用紙かのどちらか一方を用いて描くことを明示した。

結 果

(1) 死観尺度の構造

14 項目からなる死観尺度について探索的因子分析（主因子法・Varimax 回転）を行った。その結果、スクリー法で 4 因子を仮定した。その後、探索的因子分析で行われた結果が妥当かどうかについて確認的因子分析を行った（GFI = .870, AGFI = .807, CFI = .935, RMSEA = .056, AIC = 156.392）。確認的因子分析（最尤法・promax 回転）に基づいて α を算出したところ、第 4 因子の 2 項目が .416, .137 であったため、第 4 因子を消去した結果、モデルの適合度は GFI = .885, AGFI = .824, CFI = .947, RMSEA = .059, AIC = 178.757 であり、このモデルを採用した。したがって、以降の分析はこの 2 項目を削除した 12 項目で検定を行った（Table 1）。第 1 因子は「私は死んでも生まれ変わることができる」や「私の魂や靈魂は不滅である」の項目が高い正の負荷量を示していたため、「不滅」因子と

命名した。第2因子は「私にとって、自分の死は最大の恐怖である」、「私の死は最も辛いものである」の項目が高い正の負荷量を示していたため、「恐怖」因子と命名した。第3因子は「私は自分の死は予測できない」などの項目が高い正の負荷量を示していたため、「非現実感」因子と命名した。

次に、各尺度得点に対しクラスタ分析を行ったところ、3つのクラスタに分けられた。この3クラスタの特徴を捉えるために、恐怖を要因とする1要因被験者間分散分析を実施したところ、この要因の有意な主効果がみられた ($F(2, 75) = 8.58, p < .001$)。同様に、非現実感に対しても1要因被験者間を実施したところ、この要因の有意な主効果はみられなかった ($F(2, 75) = 1.458, n.s.$)。不滅に対しても1要因被験者間分散分析を実施したところ、この要因の有意な主効果がみられた ($F(2, 75) = 174.270, p < .001$) (Table 2)。HSD法による多重比較を試みたところ、死の恐怖条件においてはクラスタ3とクラスタ2、1の間に有意差がみられた ($p < .001$)。同様に、非現実感条件においてはクラスタ間に差はみられず ($n.s.$)、不滅条件においてはクラスタ1とクラスタ2の間、クラスタ1とクラスタ3の間、クラスタ2と3の間に有意差がみられた ($p < .001$)。したがって、クラスタ1は恐怖・不滅中群、クラスタ2は恐怖・不滅高群、クラスタ3は恐怖・不滅低群と命名した。

Table 1 死観尺度の因子分析

		因子			
		1	2	3	4
死への恐怖	$\alpha = .821$				
死んだら私は消えてなくなる		-.796	.107	-.032	.212
私は死んでも自然に還りかたちを変えて存在し続ける		.761	-.064	-.163	.191
死んだら私は灰あるいは土になるだけだ		-.726	.066	.079	-.094
私の魂や霊魂は不滅である		.558	-.015	.106	.200
死んでしまえば私は忘れ去られてしまう		-.531	-.024	-.010	.030
私は死んでも極楽や天国へ行き幸せに暮らすことができる		.470	.125	.117	.054
死は私がどう生きたかの集大成である		.456	.199	.161	-.318
私は死んでも生まれ変わることができる		.447	.181	-.095	.172
不滅	$\alpha = .785$				
私にとって自分の死は最大の恐怖である		-.091	.905	-.070	.014
私にとって自分の死はもっともつらいものである		.128	.726	.047	.019
非現実感	$\alpha = .741$				
私は自分の死が予測できない		.004	-.064	.875	-.102
私は自分の死が想像できない		-.078	.052	.685	.340
自分の死について真剣に考えることはあまりない		.157	-.117	.098	.416
私の死は生命の自然な姿である		.020	-.172	.062	-.364

Table 2 各クラスターの特徴

		クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	F検定
死への恐怖	度数	31	15	32	$F=8.580$
	平均値	5.935	6.400	4.719	$df=2$
	SD	1.672	1.242	1.373	$p < .001$
非現実感	度数	31	15	32	$F=1.458$
	平均値	4.194	4.133	3.594	$df=2$
	SD	1.662	1.598	1.214	n.s.
不滅	度数	31	15	32	$F=174.270$
	平均値	19.000	24.267	14.16	$df=2$
	SD	1.528	1.792	1.969	$p < .001$

(2) イメージ画の種類と死生観の関係

各死観クラスターとイメージ画ごとの人数比を求めたところ、Table 3 のようになった。イメージ画の表出について χ^2 乗検定を行ったが、差は見られなかった ($\chi^2 (2) = .110, n.s.$)。円の用紙を用いて描いた 44 人と、直線の用紙を用いて描いた 34 人の死観の違いについて t 検定を行った結果、有意差は見られなかった。また、質問紙とイメージ画の両方を回答した人と、質問紙のみを回答した人の死観の違いについて同じく t 検定を行ったが、有意差は見られなかった (不滅 $t = .20$; 恐怖 $t = .32$; 非現実感 $t = .83$; $df = 76, n.s.$)。

Table 3 死観クラスターとイメージ画の人数

		イメージ画		
		円	直線	合計
死観クラスター	恐怖・不滅中群	17	14	31
	恐怖・不滅高群	9	6	15
	恐怖・不滅低群	18	14	32
合計		44	34	78

(3) イメージ画の分類

どのようなイメージ画を描いたかについて、森田・大西 (2005) を参考に分類を行った。以下、分類ごとの人数である (Table 4)。

Table 4 イメージ画の種類と人数 ()内は%

	円環	上昇	山型	過程	下降	分岐	プロセスなし	分類困難
円	17(48.6)	0(0.0)	2(5.6)	1(2.9)	0(0.0)	1(2.9)	8(22.9)	6(17.1)
直線	4(9.3)	5(11.6)	10(23.3)	17(39.5)	3(7.0)	1(2.3)	0(0.0)	3(7.0)

考察

(1) 死観とイメージ画との関連

本研究では、ライフイメージと死生観との関連を明らかにし、各ライフイメージが死観にどのような違いを及ぼすのかを明らかにすることを目的として検討を行った。円と直線のライフイメージと死観との関係について分析を行った結果、明らかな関連は見られなかった。

その理由としていくつか挙げられる。まず、データ数が非常に少ないことが影響していると考えられる。今回の調査では有効回答数に比べ、未回収も含めた無効回答の方が非常に多かった。留め置き法による弊害が少なからずあるとは考えられるが、回収率の低さに関係するさまざまな要因の一つとして死に対する忌避感や嫌悪感が考えられる。

(2) ライフイメージ画からみられた死の捉え方

やまだ（2002）は、人生のイメージ画を通して表現されるライフサイクルをもとに、死も含む世代間のライフサイクルモデルを示している。そこでは、生涯発達の型として、成長モデル、熟達モデル、成熟モデル、両行モデル、過程モデル、円環モデルの6つが示されている。以下は、やまだ（2002）や森田・大西（2005）を参考にし、本研究において典型的に見られたイメージ画の分類とその考察である。

本研究において最も多く見られたのは、発達の様子を描いたものは過程型である（Figure 1）。これは、やまだ（2002）における過程モデルに類似したものである。過程型のイメージ画には、発達の様子を生まれてから、就学、就職、結婚、老いるといったライフイベントや身体の成長の様子を描いたものが多くみられた。またやまだ（2002）は、この過程モデルにおいて重要な次元になるものは、エイジングや社会的役割、人生イベントであると述べている。このことから、多くの人が共通すると予測される人生の歩みを想像し、死に対しても人生イベントの一つとして捉えていると考えられる。

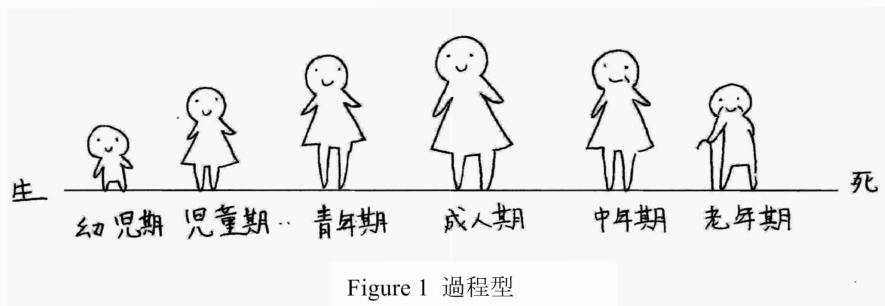


Figure 2の上昇型は、イメージ画について「生きていく中で、何かを得ている間は上がっていく」という説明が書かれていたことからやまだ（2002）の熟達モデルに相当する。この型も直線を用いて描かれており、時間の経過とともに階段が昇っていくようなイメージ画である。これは、広井（2001）の直線的ライフイメージとも共通していると考えられる。上昇型は死の直前まで成

長や進歩があり続け、死を迎えることにより上昇の線も途切れ、上昇型を描いた人は死は成長や上昇、進歩を止めるものであると受け止めていることが示唆される。この上昇型に対し、やまだ（2000）は、より高次の発達に向かう従来の発達観とも一致していると述べている。発達において、前の段階へ戻ることは退行とみなされるように、上昇型でも同様のことが言えると考えられる。つまり、生涯にわたる成長や進化といった変化をし続けることが必要とされていると考えられる。このようなライフイメージをもつ人が死に対しどのような意味づけをしているのかは検討の余地があると考えられる。

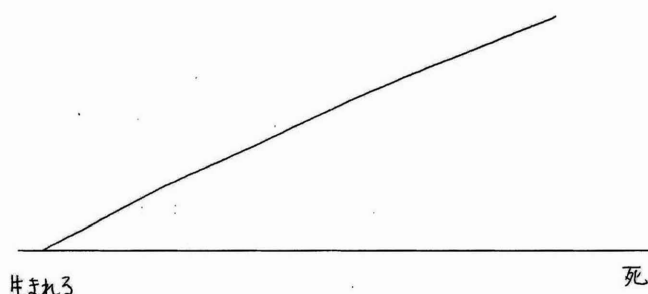


Figure 2 上昇型

Figure 3 の山型は、やまだ（2000）の成熟モデルにあたる。これは、直線を用いて描かれており、人生の中に山をむかえ、そして死に向かって下降していくイメージ画である。この山は何に対する山とは明記されていなかったが、人生に対し何らかの繁栄やピークがあり、その後はなだらかに下降していく様子が描かれている。また、単一の山ではなく波のように描かれたイメージ画もある。山型に描かれたイメージ画はいずれも、始点と終点は直線上にある。この型のイメージ画の説明で「人生いろいろあるけど、最後はもとに戻っていくかんじ」と書かれていたことから、後述の円環型と類似している点もあるが、死と生は類似した性質をもつものと捉えていると考えられる。

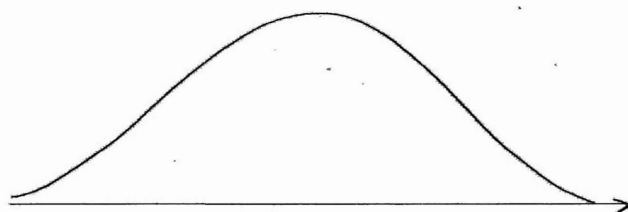


Figure 3 山型

次に円環型は、やまだ（2000）の円環モデルに類似したものである。これは人が死んでも生まれ変わる（Figure 4）といったイメージ画であると考えられる。また、円環型には直線を用いているが植物の成長の最後に種を残す様子（Figure 5）が描かれているものもある。これは、植物のイ

イメージ画は種を残し、またそこから芽が出ることを連想させることから円環モデルに分類できると考えられる。直線の用紙に円環モデルが描かれていることから、直線は単純に生と死を対極とする意味をもつのではなく、円環的ライフイメージの一部を切り取った、水平線としての見方が示唆される。また、円環型の場合、必ずしも同じ個体が生まれ変わるばかりではなく、自己の一部を受け継ぐといった世代を超えた繋がりも考えられる。このような、自己の一部の受け継ぎを表したイメージ画に、木の成長の様子とその最後に鉛筆が描かれ「木が枯れるが、その後形を変えて誰かのところに行く」というものがみられた (Figure 6)。このイメージ画は、単純に自己の生まれ変わりでなく、自己の一部が残り、他の誰かの手元に行くといった、第二の人生とも言うことができる。以上のことから、円環型のライフイメージ画は死に対し、循環する命の中の一つの区切りと意味づけていると考えられる。

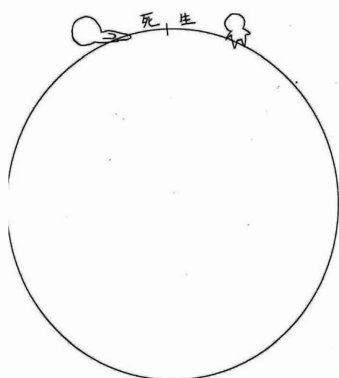


Figure 4 円環型

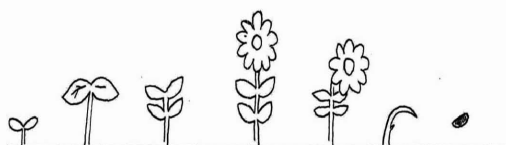


Figure 5 直線を用いた円環型 1

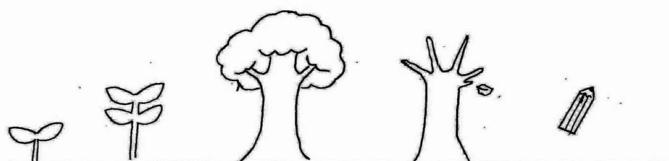


Figure 6 直線を用いた円環型 2

少数ではあるが、Figure 7 のようなものも見られた。これは単一の型ではなく、複数の型により説明ができると考えられるものである。このイメージ画は、「始めは一人だけど、人と関わっていくなかで成長し、人との関わりがなくなったら死ぬ」という説明や「初めは何もない状態だけど、人

との関わりによって円になっていく」という説明がなされている。これは他者との関わりを意識している点が特徴であり、成長とともに関わりが増加していくという点から、上昇型で説明が可能であると考えられる。また、やまだ（2002）の円環モデルの無に戻るという特徴と、このイメージ画の「一人から始まり、その後他者との関係が増加するが最後はまた一人になる」という特徴が一致すると考えられる。このことから、円環型にも分類が可能と考えられる。またこのイメージ画の特徴として、自分自身の死を個人のものとして捉えるだけでなく、他者との関係の中から捉えていることがあげられる。死の捉え方に関して、藤井（2003）は未知で孤独なものとする1人称的立場と、別れとする2人称的立場があると述べている。「人との関わりがなくなったら死ぬ」という説明から、死を他者との別れと捉える2人称的立場の視点からの記述であると考えられる。

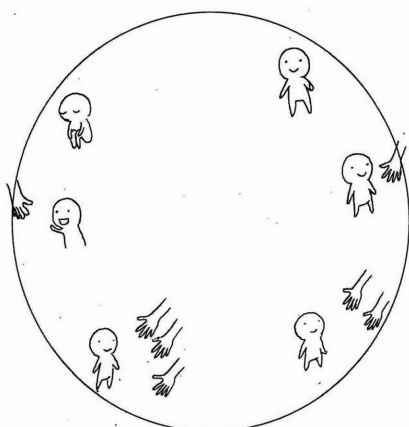


Figure 7 上昇型と円環型の混合型

また、本研究において何を用いてイメージ画を描いたかに関し、多くのイメージ画が描いた本人以外の人間一般や幾何学的に描かれていた。将来に明確な目標をもつ看護学生と大学生のイメージ画の比較を行った森田・大西（2005）は、人間に対する意識について大学生の方が人間一般や幾何学図形で描いていることから、大学生は一般化されたあるいは抽象化した捉え方をする傾向があると述べている。しかし、何を用いてイメージ画を描くかについて、筆者は森田・大西（2005）の述べるように明確な目標の有無に加え、「生まれてから死ぬまで」といったことを考える機会も、本研究でも多くが人間一般や幾何学図形を多く用いていることに影響しているのではないかと考える。イメージ画の説明の中に「今まで死について考えたことがなかったので、何を描いたらいいのか分からなかった」といったものがいくつか見られた。影山（2003）が述べるように生や死に対し考える機会が少ないことが、生や死に対して距離を持ち、人生をより一般化された、または抽象化して捉えている（森田・大西, 2005）と考えられる。

なお、本研究で多くみられたイメージ画の他にも、「今まで選んできたものとは違う未来もあるだろうし、これからたくさんある選択肢から一つを選んでいく」という説明のように、選択肢をつくり複数のライフコースを描く分岐型（森田・大西, 2005）、生から死へ至るプロセスが描かれて

いないイメージ画も得られた。

(3) 今後の課題

本研究では、円環的・直線的ライフイメージと死観との関連について検討を行った。その結果、死観との関連は見られなかった。その理由として、イメージ画からのみ得られる情報が限られていたことがあげられる。今回の調査では集団に配布する方法を採用したため、個々人に描いたイメージ画について何を描いたのか、なぜそう描いたのかといった背景を聞くことができなかった。つまり、直線を用いた円環型 (Figure 5,6) や、上昇型と円環型の混合 (Figure 7) のよう多義性をもつイメージが見られたように、描いた本人が表したかった意味を解釈しきれていない可能性がある。したがって、ライフイメージ画の特性を考慮して、今後は面接法も同時に行う必要があるといえる。

また、本研究が対象としたのは、青年期女子のみであった。青年女子は人生を生や死といった根源的なものとして見ていると考えられる (橋本, 2000) ため、今後は性差も考慮する必要があると考えられる。

引用文献

- Aries, P. (1975). *Essais sur l'histoire de la mort en Occident du moyen âge à nos jours*. *Essais sur l'histoire de la mort en Occident du moyen âge à nos jours*. Paris: Editions du Seuil. (伊藤晃・成瀬駒男 訳 1983 死と歴史—西欧中世から現代へ— みすず書房)
- デーケン, A (1996). 死とどう向き合うか NHK ライブラリー
- 海老根理絵 (2009). 青年期における死に関する心理構造の多面的理解の試み—認知的側面に注目して— 臨床心理学, **9** (6), 771-783.
- 藤井美和 (2003). 大学生のもつ「死」のイメージ: テキストマイニングによる分析 関西学院大学社会学部紀要, **95**, 145-155.
- Hankoff, L. D. (1975) Adolescence and the crisis of dying. *Adolescence*, **10**, 373-389.
- 橋本泰子 (2000). 大学生と親世代におけるライフ・イメージの研究 文教大学人間科学部人間科学研究, **22**, 105-125.
- 広井良典 (2001). 死生観を問いなおす 筑摩書房
- 影山隆之 (2003). 最近 20 年間の日本における青少年の死生観・自殺観に関する研究 こころの健康 日本精神衛生学会誌, **2** (18), 70-76.
- 金児曉嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 大阪市立大学文学部紀要, **46**, 537-564.
- 金児曉嗣・渡部美穂子 (2003). 宗教観と死への態度 人文研究, **3** (54), 85-109.
- 川島大輔 (2005) 老年期の死の意味づけを巡る研究知見と課題 京都大学大学院教育学研究科紀要, **51**, 247-261.
- 河野由美 (2004). 自己の死観と大切な他者の死観—死観モデルの検証— 21 世紀ヒューマンケア 研究機構研究年報, **10**, 75-83
- 厚生労働省 平成 22 年版子ども・若者白書人口動態統計 2011 年 12 月 5 日以下の URL を参照 <http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h22honpenhtml/html/zuhyo/hyo1102.html>

- 隈部知更 (2006) . 日本人の死生観に関する心理学的基礎研究—死への態度に影響を及ぼす 4 要因についての分析— 健康心理学研究, **19**, 10-24.
- 森田美弥子・大西呂尚 (2005) . 看護学生の「人生のイメージ画」— 死生観を探る媒介として— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, **52**, 153-163.
- 斎藤英子・林かおり・藤野文代 (2002) . 大学生の死のイメージに関する研究—TEG・Self-Esteem・身近な人の死の経験による分析— 群馬保健学紀要, **23**, 49-53.
- 澤井 敦 (2000) . 現代日本の死生観と社会構造 (上) 人間関係学研究 : 社会学社会心理学人間福祉学 大妻女子大学人間関係学部紀要, **1**, 13-29.
- Spilka, B., Stout,L., Minton, B., & Sizemore, D. (1977) . Death and personal faith: A Psychometric investigation. *Journal for scientific Study of Religion*, **16**, 169-178.
- 田中愛子 (2001) . 恭分散構造モデルを用いた老年期と青・壮年期の死に関する意識」の比較研究 山口医学, **50** (6) , 801-811.
- 田中愛子・岩本晋 (2002) . 老年期に焦点をあてた死生観・終末期医療に関する意識調査 山口県立大学看護学部紀要, **6**, 119-125.
- 丹下智香子 (1995) . 死生観の展開 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, **42**, 149-156.
- 丹下智香子 (2002) . 「死」からの連想語 KJ 法による分類—死生観の構造の検討— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, **49**, 157-168.
- 丹下智香子 (2004) . 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, **15** (1) , 65-76.
- Temper, D. A. (1970) . The construction and validation of a Death Anxiety Scale. *Journal of General Psychology*, **82**, 165-177.
- 津村直子・笹森春美・田中豪一 (1998) . 思春期の子どもの死に関する意識調査 北海道教育大学紀要, **1**, 105-112.
- 渡辺美穂子 (1998) . 自己の死と近しい他者の死への態度 日本社会心理学会第 39 回大会発表論文集 260-261.
- Wong, P. T. P., Recker, G. T., & Gesser, G (1997) Death attitude profile-revised:A multidimensional measure of attitudes toward death. Neimeyer, R.A. (Ed.) *Death Anxiety Handbook*, Research, instrumentation, and application. Washington, DC: Taylor & Francis. pp.121-148.
- やまだようこ (2000) . 日本文化の生命循環と生涯発達観 小嶋秀夫・速水敏彦・本城秀次 (編) 人間発達と心理学 金子書房 pp.106-115.
- やまだようこ (2002) . 生涯発達心理学の課題と未来 小嶋秀夫・やまだようこ (編) 生涯発達心理学 放送大学教育振興会. pp203-224.